木いちごは黒いほど甘い

田　中　美　穂

私は、Ｂｌａｃｋ Ｍｕｓｉｃについて研究を進めてきた。Ｂｌａｃｋ Ｍｕｓｉｃとは黒人による音楽で、ブルースやジャズやゴスペルやＲ＆Ｂ、ヒップホップなどの音楽のことをいう。

私はこれらの音楽に引かれて、黒人をより好意的に思うようになった。

しかし、黒人には、社会的に、これ以上は白人の世界に踏み込めないという境界線があった時代もあった。黒人はどんな事をしても、白人にはなれなかった。黒人女性がどうしても白人になりたくて、自分の黒い皮膚を剥ごうとしたエピソードが残っているほど、苦しみに耐えてきた過去もあった。

だが、これが逆に黒人の強みとなったのだ。黒人は、男性も女性も、みんな歌がうまい。ただうまいだけではなく、それは虐げられた文化の中で生まれた歌だから、迫って来るものがある。奴隷とされていた時代、その仕事の辛さを嘆いて歌ったのがブルースの始まりであったと言われているように。

黒人にはソウルがある。ここには、黒人が祖国アフリカで、自分達に与えられた限りの材料、アフリカ文化の残存であれ、秘境的なものであれを駆使して創作に向かう機会があった。これが、黒人にその独特の論理と美を与えたのだ。こうして培ったソウルは、早々に白人には真似できない。音楽に組み込まれたアフリカ起源の遺伝子も、奴隷船の航路のように錯綜したルートを経て、アメリカという世界最大の音楽消費国家に辿り着いたのだろう。

特に、音楽やダンスでは、黒人は高く評価されている。音楽やダンスを評価する時の善し悪しは、ソウルがあるか否かによって決まる。白っぽく、硬くぎこちなく、せかせかと動くのは、ソウルフルではない。黒っぽく、セクシーであることがソウルフルであるとされている。まさに、「木いちごは黒いほど甘い」のである。

黒人の“黒さ”が劣っているとされた時代とは一変したのだ。この“黒さ”を強みに変えて、アメリカを代表とする音楽にまで成長を遂げた。黒人が認められるようになった要因の一つに、この音楽がある。音楽には人の心に響く大きな力があるのだ。

（指導教員　中村敦志　　）